

世界文学全集 II-14

ジ ョ イ ス

ユリシーズ

II

丸谷オ一 永川玲二 高松雄一 訳

河 出 書 房

世界文学全集 II-17 モーム



© 1966

編集委員

阿部知二 伊藤 整
桑原武夫 手塚富雄
中島健蔵

昭和39年12月10日 初版発行
昭和41年4月30日 5版発行

定価 390 円

訳 者 大橋健三郎
発 行 者 河出朋久
印 刷 者 草刈親雄
装 幀 原 弘

印 刷・中央精版印刷株式会社
製 本・中央精版印刷株式会社
本文用紙・国策パルプ工業株式会社
同 納 入・東 邦 紙 業 株 式 有 限 公 司
クロース・東洋クロス株式会社
同 納 入・株 式 有 限 公 司 石 綿 商 店

発 行 所 東京都千代田区 株式会社 河出書房新社
神田小川町三の六

電話東京 (292) 大代表 3711
振替口座 東京 10802

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

目 次

序……………一

人間の絆……………五

年譜……………四七

解説……………（小島信夫）……四七

序

この本は、四十五年まえに出版されて、それ以来、いくつかのちがった版やさまざまな値段で、読者大衆に提供されてきた。だが、作品が長すぎるために、だれしもが買えるような値段で出版することは不可能であった。ところで、著者というものは、生来、できるだけ広い読者層をもちたいと願うものであるから、私の小説も、省略しさえすれば、この叢書（エディショナル・エディションズ）の一冊として出版することができると教えられたときには、私は一瞬のためらいもなくそれに同意してしまったのである。小説というものは、たとえば遁走曲ドンゾクのようなものではない。このほうは、まず二十小節ほど削ってしまえば、意味のないものになってしまう。小説はまた絵画のようなものでもない。絵画にあっては、要素要素がたがいにつりあって構図を完成するのである。小説はきわめて自由な芸術形式なのだ。ほとんどどんなふうにでも扱うことができる。小説はまた、はなはだ不完全な芸術形式でもある。なぜそうなのかということについては、べつのところでややくわしく説明したので、ここでは、ごく簡単にその問題に触れさえすればよい。

小説家も、自分で生計をたてていきたいと望む労働者であるから、彼が作品を書いている時代に共通な出版方法に従わねばならぬ。たとえば、ディケンズは、毎号きまったページ数で二十四冊に分けて発表される予定の小

説を書く契約をしたし、そのために、ときどき、ただ物語の筋を中断する役にしかたないような、しかもときには、必要な分量を埋めるために恥も外聞もなしに引きのばしたような、挿話をはめこまねばならなかった。たいへんりっぱな批評家たちのあいだでも、彼の小説は、適切に削除すればいっそう読みごたえのあるものになるだろうと、意見の一致を見ている。いつも金に困っていたバルザックもまた、一行いくらという形で原稿料を得ていたので、だれよりもすぐれたもつとも偉大な小説家であったにもかかわらず、書いている物語の筋とはなんの関係もないことがらを、何ページにもわたって書くことをあえて辞さなかった。ある場合など、興に乗じたというよりほか仕方がないように思えるのだが、イタリアの芸術についての長い論究を挿入したほどである。あるいは、当時は、いまよりもたつぷり時間の余裕があったから、人々はよろこんでこうした脱線をがまんして読んだのかもしれない。いまはそうではないと思う、というのは、おそらく、ただ生活の速度が早くなったからというだけではなしに、小説もまた、厳密にテーマに密着することによって得られる、あのいっそうすぐれた形式上の優雅さをもつべきだという要求を、人々が本能的に抱くようになってきたからにほかならない。

しかしながら、一篇の小説の著者は、出版社と読者大衆の要求に支配されるばかりでなく、彼が創作している時代の支配的な世論の動向からも、影響をこうむるものだ。彼は流行に影響されるのである。ロマン主義の時代には、描写のための描写にたいする興味が広まって、小説家たちは、今日ならたいいのものが飛ばして読んでもいっこうに支障を感じないような、長い、詳細な風景描写をこころみたまのだった。風景描写ということになれば、一ページを費やすよりも一行で片づけたほうが、読者にいっそう鮮明な映像をあたえることができるということがわかるまでには、長いあいだかかったのである。『人間の絆』が書かれたころは、たぐさんの小説家が、おそらくサミュエル・バトラー（一八三五—一九〇五。イギリスの作家）の『万人の路』から受けた深い感銘に刺激されてであらう、半自伝的な小説を書かねばならぬような気持ちになっていた時代であった。いま半自伝的といったの

は、もちろんそれが小説作品だからで、扱っている事実を自由に変えることは、著者の権利にほかならぬのである。『人間の絆』はまさにそういう本だった。それを書くこうと決心したころは、私は人気のある劇作家で、あちこちからひっぱりだこになっていたが、この小説を書くことによって、それまで心をさいなみつづけていた、おびたしいばかりの不幸な思い出を払いのけることができるかと確信したので、二年ほど演劇界から引退したのである。結果はまさにそのとおりになった。

だが、明らかに、こういう目的をもって小説を書くことには、ある種の危険がともなう。そういう著者は、にがい記憶から解放されんがために書くのである。読者には関心をもたず、ただ自分自身の解放にかかわりあっているだけなのだ。かりに読者になにかを伝達することになっても、それは偶然のことにすぎない。それ自体にはなんの意味もなく、ただ自分だけに、それも自分に起こったことだからというわけで、意味があるにすぎないようなある種のことがらに、意味を付加して得々としているということも、おおいにありうることなのだ。『人間の絆』のなかに、あまりに個人的な性質のものであるために一般の興味の対象になりえないか、あるいは、時の経過や流行の変化のためにはやたいたした意味ももたなくなってしまったような、文章や挿話が含まれているとしても、いっこう不思議はないのである。はたしてそれが事実かどうか、私は知らない。その判定は、よろこんで他人にまかせるつもりだ。自分の書いた一語一語が神聖侵すべからざるもので、コンマがひとつぬけ、セミコンがひとつつちがえられただけで、もう自分の作品が破壊されてしまうなどと考える作家は、ばかものである。小説は科学的な作品でもなければ、教化するための作品でもない。読者に関するかぎり、それは読者に知的な楽しさを提供しようとする作品なのだ。もしこの本が、こうした縮刷版の形で、ほかならぬそうした楽しさを引きだす新しい読者を見いだすならば、私はけっこうそれで満足するであらう。

人間の絆

主要人物

フィリップ・ケアリー 本編の主人公、生まれながらのびっこという宿命を負い、幼時に両親とも死別する。牧師のおじにひきとられるが宗教生活に入る気になれず、ドイツやパリに留学したりするが、最後に医学を勉強し、貧しい漁村で医者として生きる決心をする。

ウィリアム・ケアリー フィリップのおじ。田舎の牧師。孤児となったフィリップをひきよる。

ルイーザ・ケアリー その妻。彼女には子供がなく、フィリップを遠慮がちに愛した。

ヘイワード フィリップがハイデルベルヒの下宿で知りあった文学青年。後に彼は南アフリカに出征し腸チフスにかかって死ぬ。

ミス・ウィルキンソン おじウィリアムが世話になった牧師の娘でオールドミス。彼女がお

じの家に滞在中、フィリップと恋愛関係をもつ。フアンニー・ブライス パリの画学校の女友達。ローソン パリの画学校の友人。二人で小さなアトリエを借りて、共同生活をする。

ミルドレッド・ロジャーズ ロンドンの喫茶店のウェイトレス。フィリップは彼女を熱烈に恋するが、浮気な女で、彼を裏切る。

ネズビット夫人（ノーラ） 三文小説家。夫と別居中で、フィリップを母性的に愛する。

グリフィス ロンドンの医学校の友人。

ソープ・アセルニー フィリップの勤める病院の入院患者。繊維会社の新聞広告書き。

サリー ソープの娘。フィリップと結婚する。

サウス先生 ファーンリーの漁村の老医師。後にフィリップは、彼のもとで医療に従うことになる。

一

灰色の、どんよりした夜あけだった。ぶあつい雲が空をおおい、空気はうすら寒くて、雪を思わせる。乳母うははが子供の寝ている部屋にはいつてきて、カーテンを引きあげた。なにげなく、向かいの、柱廊玄関のついた化粧しつくい造りの家にちらと目をやると、子供のベッドに近づく。

「起きるんですよ、フィリップ」彼女はいった。

寝具をめぐって子供を腕に抱きかかえ、階下につれていく。子供はなかば夢うつつだ。

「お母さまが呼んでらっしゃいますよ」彼女はいう。

階下の部屋のドアをあけて、一人の女が寝ているベッドへ子供を抱きかかえていく。彼の母親である。母親が

両腕をさしのべると、子供はそばにからだをすりよせた。なぜ起こされたのか、たずねもしない。女は彼の目にキスをし、やせた小さい手で、白いフランネルのねまきの上から、彼の暖かいからだをなでた。思わずぎゅっと抱きしめる。

「ねむいの、ぼうや？」彼女はいった。

声はひどく弱々しく、もうすでにどこか遠くから聞こえてくるようだ。子供は答えずに、ここちよさそうにほほえんだ。大きな暖かいベッドのなかでそのやわらかな腕に抱かれていて、ひどく幸福なのだ。いつそうからだをちぢこめようとしながら母にびったりとからだをすりよせて、ねむそうな目でキスをする。まもなく目をとじると、もうぐっすり眠っていた。医者が進みでて、ベッドのそばに立った。

「ああ、どうかまだこの子をつれていかないでください」彼女はうめくようにいった。

医者はそれには答えず、厳肅な面持で彼女をながめやる。もうそれほど長くは子供をそばにおいておくことが許されないのを知ると、女はもう一度子供にキスした。

そして片手で、子供のからだを足首までなでおろした。右足を手ににぎって、五つの小さなその足指にさわってみる。それからゆっくりと左の足首をなでた。彼女はむせび泣きしはじめた。

「どうしました？」医者がいった。「疲れてらっしゃるんですね」

ものもいえずに首をふると、涙が両のほおをつたいおちる。医者がかがみこんだ。

「お子さんをおあずかりしましょう」

彼女は弱りはたていて、医者の望みにさからう気力もなく、子供を手わたした。医者がうしろの乳母にその子をあずける。

「自分のベッドに寝かしてあげたまえ」

「かしこまりました、先生」

まだ眠ったままにいる少年はつれていかれた。母親は、いまだでは悲しみにうちひしがれてむせび泣いている。

「かわいそうに、あの子はどうなるんでしょう？」

産婦付きの看護婦が彼女をなだめようとしたが、まもなく、極度の疲労から、泣き声はやんだ。医者が部屋の

反対がわのテーブルに歩みよった。テーブルには、死んで生まれた赤んぼのなきがらが、タオルをかけられて横たわっていた。タオルをもちあげて、ちょっと目をやる。医者の姿はついたてのかげになってベッドからは見えないうが、女には、彼がなにをしているか察しがついた。

「女の子だったの、それとも男の子？」と、看護婦にささやく。

「またぼっちゃまでした」

女は答えなかった。まもなく子供の乳母がもどってきた。ベッドに近よって、

「フィリップぼっちゃまは一度も目をおさましになりましたよ」と、いう。

ちよっと言葉がとぎれた。やがて、医者がもう一度患者の脈をはかった。

「たったいまは、してさしあげられることはなにもないと思います」彼はいった。「朝食をすましてから、またうかがいましょう」

「わたしがお送りいたしますわ、先生」子供の乳母がい

二人はだまって階下におりていった。玄関にくと、医者は足をとめた。

「ミセス・ケアリーの義理のお兄さん呼びよせただろうね？」

「はい、先生」

「何時にここへ着かれるか、わかつてるかね？」

「いいえ、電報をお待ちしてるんでございますが」

「あのぼうやはどうするんだ？ 邪魔にならないところへやってしまったほうがいいと思うが」

「ミス・ウオトキンがあずかるといっておられます」

「だれだね、それは？」

「ぼっちゃまの名づけ親でございます。先生、おくさまはおなおりになるとお考えでございますか？」

医者は首をふった。

それから一週間のちのこと。フィリップは、オンズロー・ガーデンズにあるミス・ウオトキンの家の、応接間の床にすわっていた。一人っ子で、一人遊びにはなれていたのである。どっしりした家具が部屋いっぱいにな

つけられ、ソーファには、どれもこれも、大きなクッションが三枚おいてあった。肘かけ椅子にも全部クッションがひとつずつついている。そのクッションをすっかり集め、軽くて動かしやすい、金色に塗った夜会用の椅子を利用して、彼は念いりなほら穴をひとつ作っていた。このほら穴のなかで、カーテンの背後にひそんでいるインディアンから身をかくしているという寸法なのだ。床に耳をあてて、平原を疾駆していく水牛の群れに耳をすます。やがて、ドアがあく音をききつけると、彼は見つけられまいと息をこらした。が、手が乱暴に椅子をひきずりだし、クッションはばらばらとくずれおちた。

「このおいたさん、きつとミス・ウオトキンにおこられますよ」

「やあ、エマ！」彼はいった。

乳母はかがみこんで彼にキスすると、それからクッションをはたいてもとの位置にもどしはじめた。

「もううちへかえるの？」と、彼がきく。

「そうですよ、おつれしにきましたのよ」

「新しいドレスを着てるんだね」

それは一八八五年のことだったので、彼女は腰あてをつけていた。ガウンは黒のビロードで、袖はタイト、肩はゆるやかに傾斜して、スカートには大きなひだ飾りが三段についている。かぶっている帽子は、ビロードのひものついた黒のボンネットだ。彼女はためらった。予期していた質問をしてくれなかったので、あらかじめ準備していた答えをいいたすことができなかったのだ。

「お母さまのご病氣のことをおききにならないの？」とうとう彼女はいった。

「ああ、忘れちゃってたよ、ぼく。お母さまはどうなの？」

いよいよいいだすときがきた。

「お母さまはたいへんおしあわせでいらっしやいますわ」

「ああ、よかった」

「お母さまはいつておしまいになりましたのよ。もう二度とお会いになることはできませんわ」

フィリップにはなんのことかわからなかった。

「どうして？」

「お母さまは天国にいらっしやるんですの」

彼女が泣きだすと、フィリップもよく意味がわからなままに泣きはじめた。エマは背の高い、骨太の金髪女で、道具の大きい目鼻だちをしていた。デヴォンシア（イングランドの南西部の州）の出で、長年ロンドンで奉公ぐらしをしてきたにもかかわらず、一度もお国なまりをなくしたことがない。涙につられてますます気がたかぶり、彼女は少年を胸にしっかりと抱きしめた。この世でただひとつの、なんの利己心もない愛をうばわれたその子のあわれさが、漠然ながらに感じられる。この子が見しらぬ人の手に渡されなければならないというのは、おそろしいことのようなだ。が、やがて、彼女は氣をとりなおした。

「ウィリアムおじさまが、ぼっちゃまに会いたいといって、おうちで待ってらっしやいますよ」と、彼女はいった。「ミス・ウオトキンにさよならをいいにいつてらっしやいな、そしたらいっしょにおうちへかえりましょう」

「ぼく、さよならなんかいいたくないや」涙を見せたくないという本能から、そう彼は答えた。

「じゃあ、よろしゅうございます。急いで二階へ行って、お帽子をとってらっしゃい」

彼が帽子をとって下におりてくると、エマは玄關で待っていた。食堂の向こうの書斎で話し声がしている。彼は立ちどまった。ミス・ウオトキンと彼女の姉が、友達と話をしているところなのはわかっていたので、なかへはいつていったら、みんなが自分に同情してくれるような気がしたのだ（彼は九つになっていた）。

「ぼく、ミス・ウオトキンにさよならをいいにいつてこよう」

「そうなさいまし」エマがいった。

「ぼくがいくからって、先にいつてみんなに知らせといてね」彼はいった。

いまの機会をせいっぱいに利用したかった。エマがドアをノックして、なかにはいつていった。彼女の声が聞こえてくる。

「フィリップぼっちゃまが、さよならをいいたいとおっしゃってますよ、ミス」

話し声が突然はたとやみ、フィリップはびっこをひき

ひき部屋にはいつていった。ヘンリエッタ・ウオトキンは、髪を染めた、頑丈な赤ら顔の女だった。当時は、髪を染めたりするとかくの評判の種をまいた時代だったので、フィリップは、彼の名づけ親が髪を染めかえたとき、うちでさまざまな噂話をきいたものだった。姉といっしょにくらしているのだが、姉のほうは老齢に身をゆだねて満足のていである。フィリップの知らない二人の婦人が訪問中で、好奇の目で彼を見つめている。

「かわいそうな子」腕をひろげながら、ミス・ウオトキンがいった。

彼女は泣きはじめた。そのときフィリップは、彼女が昼食に食堂にやってこなかったわけと、黒いドレスを身につけているわけをさとした。彼女は口もきけないようすだった。

「ぼく、うちへ帰らなくちゃならないの」とうとうフィリップはいった。

彼がミス・ウオトキンの腕をすりぬけると、彼女はもう一度彼にキスした。それから彼は、彼女の姉のそばに

よって、さよならをいった。見しらぬ婦人の一人がキスしてもよいかときくので、おごそかに許可をあたえる。

泣いてはいるのだが、自分がまきおこしている興奮がたまらなく楽しくもある。もう少し長くそこにいて、ちやほやしてもらいたいところだったが、彼が出ていくのをみんなが予期している気配なので、エマが待ってるから、と、いった。彼は部屋を出た。エマは地下室において友達と話をしていたので、踊り場で待ちうけた。ヘンリエッタ・ウオトキンの声が聞こえてきた。

「あの子の母親は、あたしと大の仲よしでしたのよ。あの人が亡くな^なったなんて、とても考えるにしのびませんわ」

「おまえはお葬式にいったやいけなかったんだよ。ヘンリエッタ」と、姉がいう。「とり乱してしまうにきまってるんだから」

すると、見しらぬ婦人の一人が口を出した。

「かわいそうに、あんな小さな子が世のなかにひとりぼっちだなんて考えると、おそろしくなりますね。びっこを引いたようでしたけど」

「ええ、あの子はえび足なんですのよ。母親にとって、とても悲しいことでしたけれどね」

そのときエマがもどってきた。辻馬車を呼ぶと、彼女は馭者に行き先を告げた。

ケアリー夫人の亡くなった家に着くと——それは、ケンジントン区のノッティンガム・ヒル・ゲイトとハイ・ストリーートのあいだの、ものさびしい、上品な通りにあった——エマはフィリップを客間につれていった。おじが、贈られた花輪の礼状を書いていた。着くのがおそくて葬儀に間にあわなかったそのひとつが、ボール箱にはいったまま大テーブルののっかっている。

「フィリップぼっちゃまがお見えになりました」エマがいった。

ケアリー氏がおもむろに立ちあがって、少年に握手した。それから、思いだしたようにかがみこむと、ひたいにキスをした。中背よりもやや低めの、肥りじしの男で、長くのばした髪の毛を頭の上になであげて、禿げをかくしている。ひげはきれいにそりあげてあった。とと

のった目鼻だちで、若いころは男っぷりがよかつたろうと察せられる。懷中時計の鎖に金の十字架をつけていた。

「これからおまえはおじさんのうちでくらすことになるんだよ、フィリップ」ケアリー氏はいった。「どうだ、氣にいいのか？」

二年まえ、水ぼうそうをわずらったあとで、フィリップはその牧師館に送られたことがあったが、思い出しているのは、おじやお婆のことよりも、むしろ屋根裏部屋と大きな庭の記憶が残っているばかりだった。

「はい」

「おじさんとルイーザおばさんを、ほんとうの両親だと思ってくれなくちゃいけないよ」

子供の口が少しふるえ、ほおが上気したが、答えはなかった。

「おじさんは、お母さんからおまえをあずけられたんだよ」

ケアリー氏は、どうにもすらすら考えを述べる事ができなかった。義理の妹が死にかけているという報らせ

がとどいたとき、すぐロンドンに向けて出発したとはいふものの、みちみち、もし妹が死んで、どうしてもその息子を引きとらねばならぬような破目になったら、どんなに自分の生活が乱されることだろうかと、そのことだけしか考えていなかったのである。彼は五十の坂もはるかに越え、三十年間つれそってきた妻には子供がなかった。そうぞうしくて乱暴者かもしれない男の子があらわれることは、けっして愉快な予想ではない。義妹が好きになれたためしも、彼には一度もなかった。

「明日おまえをブラックステイブルへつれていくつもりだ」と、彼はいった。

「エマもつれて？」

子供が彼女の手を片手をすべりこませると、彼女はそれをぎゅっとにぎりしめる。

「エマにはひまをとってもらわなくちゃならんだろうな」ケアリー氏はいった。

「でも、ぼく、エマにいっしょにきてほしいの」

フィリップが泣きだすと、乳母も泣かないではいられなかった。ケアリー氏は手のほどこしようもなく二人を